



養老 孟司さん

医学博士
解剖学者

巻頭インタビュー p.2

知っておきたい教育 NOW p.4

- ① 豊かな学びを保障する持続可能な教育の実現
- ② チーム担任制を手段として、心理的安全性ベースの学校を創る

きょういく見聞録 p.8

- ① 校歌をよりカラフルに
～「校歌整備プロジェクト」のあゆみと発展～
- ② 全ての若い世代へ
豊かな舞台芸術にふれる機会を

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

【連載第1回】

10代の読者に向けた本づくり
～岩波ジュニア新書の取組～

Front Runner p.15

【連載第2回】

現代アートのすゝめ

ほっとな出会い p.16

岸壁幼魚採集家

鈴木 香里武さん

正解のない世界で 自ら考え、生きぬく力を

医学博士 解剖学者 | 養老 孟司さん

ベストセラー『バカの壁』は
西洋化への違和感から誕生した？

1995年まで東京大学に勤めていましたが、ある時期から「英語で論文は書かない」と宣言して、そのせいで長らく干された状態になっていました。まあ当然と言えば当然でしょうね。英語でないと論文が評価されないのが学会の常識ですから。

最近になって「なぜ、あれほど英語に反発していたのだろう？」と考えたところ、明治維新以降に、外から押しつけられたものに本能的に抵抗していたのだろう、という結論に行き着きました。

私は昭和初期の生まれですが、自身に根を張っているのは明治的な古い価値観なのです。4歳になる少し手前で父が亡くなり、明治生まれの母の考えを軸とした母子家庭で育ったことが自己形成に深く影響したのですよね。しかし、明治維新以降、日本は西洋化に傾いていきました。第二次世界大戦後はご存じのとおり、これまでの常識や価値観は根底から覆りました。教科書を墨で塗りつぶし、西洋の知に追いつき会得してゆくことが学校での勉強＝学びという構造になったのです。唯一、生き残った科目は国語つまり日本語です。英語を公用語にしようとした動きもあったようですが、

ローマ字を取り込み、かな文字や漢字などと組み合わせる日本語を守りつつ、独自の言語文化へと昇華させたのです。明治的価値観の私は西洋化に違和感を覚え馴染めなかつた。だから英語に嫌気が差し、日本語で執筆を続けたのでしよう。そうして『バカの壁』が生まれたわけですが。

ともかく、この島国で脈々と培われたものをブツンと分断し、強引に外の価値観をとってつけた。現在の教育とはそういう構造の上に成り立っているのです。不登校も少子化も、子どもの自殺も根本の原因はこのあたりにあるんじゃないかと思っています。

自然が教えてくれるもの

古来、日本には「子どもは自然がいちばん」という共通認識があり、過剰に手を加えて子どものあるようを変えようとはしませんでした。医師であった私の母も「あなたには心はかけたけど、手はかけなかった」とよく言っていましたね。女手一つで小児科医院を営みながら子育てをしていた忙しさゆ



PROFILE

1937年、神奈川県鎌倉市生まれ。東京大学名誉教授。医学博士。解剖学者。1962年、東京大学医学部を卒業後、解剖学教室に入る。東京大学大学院医学系研究科基礎医学専攻博士課程を修了。助手、助教授を経て1981年より東京大学医学部教授。1995年、退官。その後は北里大学教授、大正大学客員教授を歴任。1989年、『からだの見方』（筑摩書房）でサントリー学芸賞受賞。2003年に毎日出版文化特別賞を受賞した『バカの壁』（新潮新書）は450万部を超えるベストセラーに。大の虫好きとして知られ、現在も昆虫採集や標本作製を続けている。その他『唯脳論』（青土社・ちくま学芸文庫）、『遺言。』（新潮新書）など著書多数。

えの言い訳ともとれますが……。ともかく、私はほどよくほうっておいてもらえたわけで、主な遊び相手は自然でした。それが今はピアノやバイオリン、塾通い……。子どもの習いごとともほぼ西洋の借りものではないですか。そんなことより自然の中で思いつき遊ばせたほうがよほどよいと思います。私は「自然が自分に入ってくる」と表現していますが、自然に浸ることで受け取れるものがたくさんあるのです。樹々や花、虫や川の生き物を見て「不思議だな」と思ったり「きれいだな」と感じたり、香りを嗅いだり……。「どうやって遊ぼうか」「あつちに行ったら何があるだろう」などさまざま「問い」も生まれてくるでしょう。私が解剖学の道に進んだのも人体という自然に向き合うことがなにより深い学びだ

ならないでしょうか？

直ちに正解を求め コスパを追求する現代人

と直感したからです。臨床では患者が向こうからやってきて「ここが痛い」だのなんだのと課題をくれるでしょうが、死体はしゃべりません。解剖学では人体のありようを注意深く眺め、課題から考えるしかないので。しかし、今は子どもの中に問いが生まれる前にすべきことや課題が勝手にやってくる。むしろ、自分から動かないと何も得られない、という体験こそが今の子どもに必要なものだと思いますね。

以前、いじめを苦に自殺した子どもの手記を読んだのですが、そこに書かれていたのは「父がこう言った」とか、「先生がどうした」とか人との関わりのことばかり。花鳥風月、つまり自然のことが一切書かれていなかった。この子が春も秋も感じられないほどに追いつめられていたことに心が痛む一方、人事のことしか頭にないということは、他者の視点を通した自分という基準のみで生きているともとれます。外の価値観に合わせ「変わらなくでは」と努力してきた日本とどこか重



最近受けたインタビューで「コスパ、タイプ主義をどう思いますか？」と聞かれ、即座に「そんなにコスパが大事なら、生まれてすぐに死んだらいいじゃないか。コスモも時間もかからないでしょ」と答えました。なぜ「どうしたら幸せか」とシンプルに考えられないのでしょうか？ 後白河法皇が編纂させた歌集『梁塵秘抄』には「遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん」という有名な歌があります。私たちはこの世を存分に楽しむために生まれたのではないのでしょうか？ 私は虫に向き合っている時がいちばん幸せですが、全くコスパのよくない活動ですよ。

外の価値観に合わせて自分を変えようとし、あげくはコスパとタイプのことばかり考えて生きるなんて、そりゃあ死にたくなるはずですよ。今の日本は皆が不幸なほうへ、不幸なほうへと歩んでいるように見えます。

こういうことを言うと「じゃあどうすればいいんですか？」と必ず聞かれるのですが「そろそろ自分で考えてくれよ」と思います。テレビで健康番組などを見ていると「こうすれば健康になる」という内容のものばかりで「そ

んなに簡単ではないだろう」と呆れています。人体は自然と同じ、いまだ神秘に満ちたものです。健康になるかもしれないし、ならないかもしれない。やってみなければわからないのです。しかし現代人はどんなことも「わかるはず」「わかるべき」と確たる正解を拙速に求めます。原因があつて解決策がある世界を理想とし、安心・安全で快適な都市を形成して自然から離れたいこうとする。想定外の事態を避けたい心情はわかりますが、宇宙や地球はもとより世界は謎だらけで、この世は予測がつかないものなのです。

皮肉にもそれを実感するのが大きな地震や災害の発生時です。例えば、もし首都直下型地震が起こったら……？ 私なんかは歳も歳ですからよしんば生き残っても、その先に待っているのは災害関連死でしょうね。断っておきませんが、災害が起こって人が亡くなるのはしかたがないとか、災害対策や予測の意味がないとか言っているわけではありません。ただ、予測はあくまで予測なのです。想像や予測をはるか超える事態に遭遇したとき、それでも自分の頭で考え生きぬこうと粘る力を、私たちは「知恵」と呼んでいたのではないのでしょうか？

情報より知恵と教養を

わかる≡知識が身につく、という

状態を説明するために、私はよくガン告知の例を出します。「もし、あなたがガンで余命いくばくもないと知れば、その瞬間からこの世の見え方が違ってくるでしょう」と。ある情報が入ることで、自分の考え方や行動が変わることが、わかる≡知識が身についた、状態なのです。何かを注意され「わかった」と答えたものの、考えや行動が変わらないのであれば、聞いただけでわかっていない、状態、情報が脳に記録されただけなのです。そう考えると教養とは？ これは私の恩師の言葉なのですが「人の心がわかるといふこと」だと言っていましたね。例えば何か困っている人がいるという情報を得て「手を差し伸べたい」「何かできることはないか？」という考えに至ることが、教養、なのだと。

子どもたちに身につけてほしいのは知恵、そして教養ですよ。スマートフォンを覗けば情報が雪崩のように押し寄せ、AIが最適解らしきものを提示する昨今、私たちが心がけるべきは、他人が与えてくれる安易な正解に飛びつかず、時間がかかっても自分の頭で考え、教養を身につけることです。

そのためにはやはり机にかじりついているだけではいけません。たまには自然界に身を置いて、花鳥風月を愛でる時間を過ごしてはいかがでしょうか？

豊かな学びを保障する 持続可能な教育の実現



東京都葛飾区立原田小学校

校長 三宅 眞

の充実を図るためには、業務の優先順位や分担のあり方を見直す必要があった。特に、行事準備や会議資料の作成、保護者対応などに業務が集中する時期には、教員の負担が偏りやすく、教育活動に支障をきたすおそれがある。これらの課題に対しては、業務の平準化やICTの活用、会計年度任用職員等の配置など、具体的な改善策を講じる必要があると考えた。

- ポイント**
- ① 最優先は教員が児童と向き合う時間の創出
 - ② 業務の優先順位やあり方は、複数の視点で見直す
 - ③ 児童、保護者、教員の三方にメリットを生む改革が未来へつながる

教育現場のReデザイン

近年、教員の長時間勤務が常態化しており、働き方改革の必要性が一層高まっている。文部科学省が令和4年度に実施した「教員勤務実態調査」(以下、調査)によれば、小学校教諭の平日の平均在校時間は10時間45分、週あたりでは52時間47分に達しており、法定勤務時間(週38時間45分)を大きく上回っている。また、小学校教員の約64・5%が週50時間以上勤務しており、14・2%は過労死ラインとされる月80時間超の時間外労働を行っている。

このような状況は教育の質の低下のみならず、教員の心身の健康にも深刻な影響を及ぼしている。実際、

長時間勤務による疲弊は、授業準備や児童との関わりに支障をきたすだけでなく、メンタルヘルス不調や離職の要因ともなっている。こうした課題を受け、文部科学省は令和7年に「教育職員の業務量の適切な管理に関する指針」(以下、指針)を改正し、教員の健康と福祉の確保を求める通知を发出している。本校においても、教員が児童と向き合う時間を確保しつつ、業務の効率化と負担軽減を図る必要があった。教員が本来の教育活動に専念できる環境整備こそが、持続可能な学校運営の鍵である。

教育本質への回帰

こうした分析を踏まえ、教育活動

なお、改善に向けた取組は校長一人で進めたものではなく、副校長とともに主幹教諭、主任教諭と連携し、教員の声をていねいに拾いながら進めてきた。組織としての協働体制を築くことを意識するとともに、教員一人一人が自己の働き方に課題をもち、自ら改善に取り組む姿勢を大切にした。

児童と向き合う時間の創出

改善は十分な時間をかけて検討し、本校では、教員の業務負担軽減と教育活動の質向上を目的に5点の取組を進めた。これらは、文部科学省が示す指針や自治体の働き方改革推進方針を踏まえ、学校現場に即した改善策として検討したものである。実施にあたっては学校評議員会

で意見を求め、保護者・地域との合意形成をいねいに図りながら進めた。以下、取組について具体的に説明する。

①現場と家庭の視点の融合

学校便りの一元化は、教員にとっては発行業務の分担や調整の負担軽減につながり、他の教育活動に集中する時間の確保が可能となった。

一方、保護者にとっては情報が整理され、必要な内容を一目で把握できるようになることで、学校との連携がより円滑になった。教員の働き方改革と保護者の利便性向上を両立する取組として高い効果を実感している。

②系統的な指導の重点化による時間創出

本区では、第4学年以上を対象とした悉皆学力意識調査を実施している。本校では、独自に第2・3学年から学力意識調査を実施することで、児童一人一人の学力定着状況を早期に把握し、個別最適な学びの推進につなげた。教員は調査結果をもとに課題を的確に捉え、指導の重点化や支援の工夫が可能となるため、指導準備や対応の効率化が図られた。データに基づく教育活動は児

童の学びの質の向上にも寄与している。

③記述から対話への転換

通知表「あゆみ」の総合所見を見直し、年2回の個人面談に移行することで、教員の記述業務が軽減され、児童への指導や教材研究にあてる時間の確保が可能となった。文部科学省の調査によれば、小学校教員は通知表の作成に年間平均33・9時間を要しており、業務負担の大きな要因となっている。個人面談では、教員が保護者と直接顔を合わせて話すことで、児童の成長や課題を共有する機会が生まれ、教育的な連携が深まった。業務の精選と対話の充実が児童理解を深め、教育の質を持続的に高める効果があった。

④時程再編による校務の整理

週時程を見直し、一週間を通して同じ時間割構成とすることで、児童にとっては日々の流れがわかりやすくなり、生活リズムが安定した。加えて、特別時程も見直し、下校時刻を30分繰り上げたことで、教員には週150分、一月約6000分の事務時間を確保することができた。この時間は教材研究や児童支援、校務整理にあてられ、教育活動の質の向上

にも寄与している。さらに、放課後にまとまった時間を確保することで、教員どうしの打ち合わせや情報共有が円滑になり、学校全体の連携強化にもつながった。

⑤即時的な授業改善と教育改革

本校では一部教科担任制を導入した。この取組により、教員は同一の授業を複数学級で繰り返し実施することができ、授業内容の改善が進むとともに、教材研究にかける時間の効率化が図られている。さらに、教科を焦点化することで専門性が高まり、指導の質の向上にもつながっている。複数の学級を担当することは、児童の多様な理解や反応にふれる機会を増やし、児童理解の深化に結びつく。児童にとっても、一部教科担任制の導入は大きなメリットがある。複数の教員による評価や指導を受けることで、多面的な視点からの支援が可能となり、学びの充実が期待される。また、教科ごとに異なる教員と関わることは、学習意欲の向上や中学校への円滑な接続にも効果がある。

こうした取組は、国や自治体の方針とも一致している。文部科学省は令和3年の中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指し

て」において、小学校高学年からの教科担任制導入を明記している。また、東京都教育委員会は令和6年に策定した「学校における働き方改革の推進に向けた実行プログラム」において、令和10年度までに12学級以上の小学校全てで第5・6学年における教科担任制を実施する方針を明示している。

本校では、これらの国・都の方針を踏まえ、段階的に教員の専門性を生かした授業づくりと児童理解の深化を両立させる体制づくりを進めている。

未来へつなぐ教育

教員の働き方改革は、単なる業務の効率化を目的とするものではなく、児童の豊かな学びを保障するための基盤整備である。教員が児童と真摯に向き合う時間を確保することが、これからの日本の学校教育において求められる姿であり、持続可能な教育の実現に不可欠である。

チーム担任制を手段として、 心理的安全性をベースの 学校を創る



前 兵庫県明石市立貴崎小学校
校長 中野 裕香子

(現 高丘小中一貫教育校 明石市立高丘西小学校 校長)

なり」と言われる人的環境を重視し、新しい価値観を受け入れる「新奇歓迎」の意識を高める。

② 子どもの多様性理解と柔軟な支援・指導を行う。

③ 心理的安全性を基盤に、チーム学校の柔軟さ・寛容さを高め、子どもと教職員のメンタルヘルス保持、向上につなげる。

導入の背景

不登校児童生徒は35万3千970人(2024年度)、公立学校における教員の精神疾患による休職者は7千119人(2023年度)に上る。要因はさまざまではあるが、「文部科学省委託事業 不登校の要因分析に関する調査研究(2024年公表)」によると、「教職員への反抗・反発」「教職員とのトラブル」の項目をきっかけ要因として選択した教員は5・5%に対し、子ども52・6%、保護者65・2%と、学校側と不登校の子ども・保護者側には、大きな認識の差が見られる。

また、教員の休職理由の最多は「児童・生徒指導」(26・5%)で、教員と子どもとの関係性や指導・支援への課題の大きさがうかがえる。教員の仕事は「感情労働」と言われる。アメリカの社会学者アーリー・ラッ

ポイント

- ① チーム担任制は、みんなで子どもをみる多様で柔軟な仕組み
- ② 心理的安全性を基盤に、教職員・地域住民が連携・協働し、寛容に子どもの多様性を尊重する
- ③ 理念を共有し、継続的に「みんなで育む学校文化」を創る

チーム担任制とは

チーム担任制とは、「みんなで子どもをみる」仕組みである。複数の教員で複数学級を担当することで、一人の担任が責任を抱え込みがちになる従来型の体制に変化をもたらすことができる。その形は学校の運営や規模、子どもの実態によって異なり、「これがチーム担任制だ」という基本形はない。目的も、子どもの自律性の育成や教員の働き方改革、学校経営の改善などさまざまである。

近年はメディアや書籍でもその効果が取り上げられ、論文でも目にするようになった。その一方、責任の所在の曖昧さや、教員と子どもの関係の希薄化、情報共有の難しさ

期待する効果と目標

といった課題点に対する懸念の声も聞く。私は先行実践校から学びを得ながら、チーム担任制の効果に焦点をあてて実践を進めた。

私が目ざすのは、「心理的安全性をベースに、子どもの多様性を尊重した、みんなで子どもをみる学校」である。チーム担任制を手段として、教職員が互いに支え合いながら多様な子どもを理解し、保護者や地域のかたを含む大人の意識が変わっていくことで、子どもと大人のウェルビーイングの循環が生まれることを期待し、次の三つを目標に掲げた。

① 人的・物的・自然・社会の四つの環境調整を行う。特に「教育は人

セル・ホックシールドが、肉体労働や頭脳労働とは別に第3の労働として「感情労働 (emotional labor)」という概念を提唱した[※]。これは、「公的に観察可能な表情と身体的表現をつくるために行う感情の管理が必要な労働」であり、他の労働と同じく「賃金としての交換価値を有する」とされている。感情労働を要する仕事に献身し、燃えつきてしまう危険性もあるとされ、いくつかの調査研究では教員の感情労働とバーンアウトの関連も指摘されている。これらの状況から、従来の「一人担任制」が子どもと教員双方のメンタルヘルスに影響している可能性が示唆される。複数の教職員が支え合う新たな体制への転換が必要だと考える。

[※] A・R・ホックシールド著「管理される心 感情が商品になるとき」(世界思想社)より

心理的安全性を土台にした実践

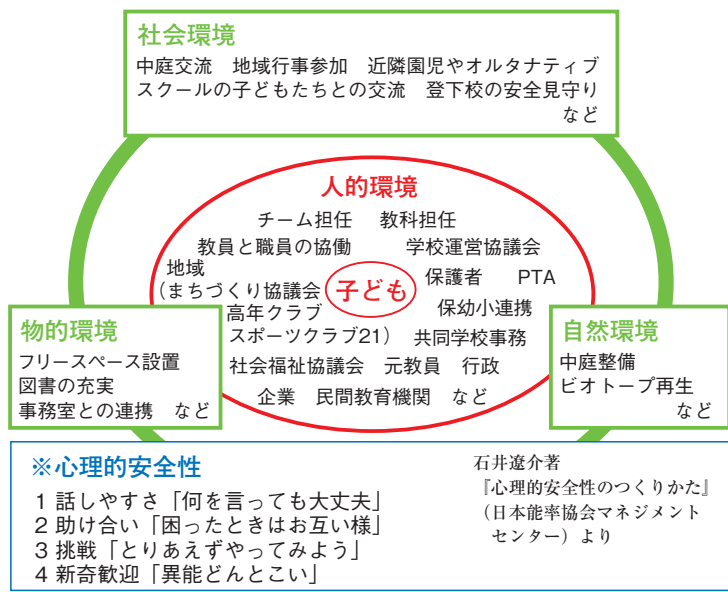
明石市立貴崎小学校での2022～2023年度は、心理的安全性の土台づくりに重点を置いた。地域や保護者、有識者を含む学校運営協議会と連携し、従来の学校観を問い直した。教職員と対話を重ね、段階的にチーム担任制を試行した。

子どもや保護者とも意見を交わし、2024年度2学期から複数学年複数担任制(3・4年生、5・6年生でのチーム担任制)の本格実施に至った。大学教員3名の指導助言を受けながら、先行実践校との交流やインクルーシブ教育研修、学校適応感尺度を活用した児童理解研修を実施するなど、多角的・多面的に取り組んでいった。

その過程で、学級経営や指導・支援が担任一人の力量に偏ることが緩和され、教員どうしの協働による児童理解・教育技術の向上や業務改善への意欲がより高まった。

さらに、地域・行政・企業・PTAなど多様な主体が関わり、長年困難だった中庭のビオトープ再生にも着手できた。企業の協力で登下校の見守り支援者(スクールガード)も増員できた。また、学校運営協議会の賛同で、地域のオルタナティブスクールの子どもたちが校内で活動し、近隣園児が休み時間に本校児童と自由に交流するなど、「みんなで地

《みんなで子どもをみる学校の実践図》



域の子どもをみる」文化が浸透していった。そこには、柔軟で寛容な人たちの協働の姿があった。

私は「2025年度からは全学年で実施してはどうか」と提案し、約3か月の対話を経て実現した。4月に転勤となったが、新しいメンバーが理念を受け継ぎ、現在、全学年(低学年・中学年・高学年での複数担任制)で実践中である。

理念の浸透と継承

子どもや保護者から「校長が異動しても、チーム担任制は続きますか」と問われた。私も教職員も迷いなく「続けます」と答えた。校長が代わっても体制が継続されるかは、独自実践が必ず直面する課題であり、学校に関わる人々との理念の共有が必要となる。先行実践校の校長から「教職員への理念浸透が重要」と学んだ。その学校は「自律」をキーワードに掲げていた。私は「心理的安全性」を理念の中心に据えた。チーム担任制はあくまで手段であり、その根底にある理念こそ、その学校文化を支えるのである。

2024年度に立ち上げた「チーム担任制実践研究グループ」(兵庫県教育委員会教職員自主的研究推進事業)には、2025年度さらに同志が増えた。本グループ主催で夏に実施した「第3回チーム担任制実践交流研修会」では、実践2校の発表と大学教員の講演、小グループ別意見交流を行い、好評を得た。グループメンバーを中心に、これまでチーム担任制を先導されてきたかたがたも兵庫県内外から参加くださった。冬には第4回を開催予定である。

子どもたちの多様性を尊重し、みんなで柔軟さと寛容さをもって育むために、これからもチーム担任制を通して、心理的安全性を基盤とする学校創りを探究していきたい。

校歌をよりカラフルに 「校歌整備プロジェクト」のあゆみと発展



■校歌を題材とした音楽の仕事についての授業中の著者。浜松市内の中学校にて。

一般社団法人全日本校歌協会

代表理事 塚本 修也

**序奏.. 楽譜を整備・保存
していききたい**

楽譜は「作者からのお手紙」と言われています。約200年前に作曲されたベートーヴェンの交響曲第九番は作者の直筆譜(原譜)が残っており、そのおかげで複写(コピー)されても芸術的価値を損なうことなく、作者が意図したとおりに演奏することができます。

私がプロの演奏家として全国の学校を回り公演をしていた時、その学校の校歌でコンサートを締めくくることがよくありました。たいていは学校からコピー譜を渡されるのですが、その状態が悪く、作者の意図を読み取れないことがあったのです。もとより、誰かの手書きが加えられたりすると、その時点で原譜とは異なるものになってしまいます。原譜を保管してあればまだよいのですが、新設校はともかく、20年、30年、中には100年

以上の歴史をもつ学校もあります。校歌の制定が何十年も昔のことだと「さて、原譜はどこにあるのやら」ということになりかねません。まずは作者からの大切なお手紙を「整備・保存しよう」という思いに賛同した有志が集まり、当協会が立ち上がりました。

**提示部.. 現状はどんな
問題がある？**

私は国産のオルガン第一号が作られ、「音楽のまち」と言われる浜松市の出身です。その浜松市内の校歌はどのようなものか？ 教育委員会の協力の下、市内の小学校を巡ってみると、やはり気にかかる点が見えられました。

「いつ作曲されたものか不明」「繰り返しのコピーにより音符なのかゴミなのか判別できない」「歴代の伴奏者による書き込みが多く、元の楽譜がよく見えない」から始まり、「メロディーに伴奏の和音が合っていない」「小学生には難解すぎる」「子どもたちは歌詞を理解して歌っているのだろうか？」「単純化しすぎてメロディーが生かされていない」「歌う場所にピアノがないケースがある」「伴奏できる人がいない」など、楽譜の保管以外にもさまざまな懸念点や課題が横たわっていたのです。

校歌の使い勝手 展開部..をよりよくして いこう

そこで、まずは浜松市内から整備を
始めようと市からの事業補助金をいた
だき「校歌整備プロジェクト」を実施。
3年かけて市内全99校のうちの約半分
の小学校に携わりました。現場からの
さまざまなご意見・ご要望に耳を傾け
ながら試行錯誤した結果、次のような
手順や内容にまとまっています。

- ド** 楽譜の現状を調査・検証して、音楽の先生と問題点や要望をディスカッション
- レ** 市や学校の図書館、資料室、職員室、校長室で作者の情報や直筆譜などの資料集め
- ミ** 小学生でも弾きやすい簡易伴奏版の制作を作曲家に依頼
- フ** プロの歌手とピアニストによる歌唱を録音し、参考音源と動画を制作
- ソ** ICT化を見据えて参考音源をQRコードから再生するシステムを構築して楽譜に添付
- ラ** 楽譜、音源に加え、学校の校章をデジタル化したものをCD・Rに収録
- シ** 楽譜出版社に楽譜の浄書（清書）を依頼し、現行楽譜と簡易楽譜、参考資料、CD・Rなどを一冊にまとめて製本
- ド** 製本された楽譜（成果物）を学校に届ける



■「校歌整備プロジェクト」の成果物。現行楽譜とともに小学生が伴奏できるように簡易伴奏版も制作し製本。QRコード付きで参考演奏が視聴できる

再現部..校歌を見直す

校歌について調べを進め、校歌の取り扱い方法を模索していく中で、生徒

① 世代を超えて大切に歌われてきた校歌は、なるべく現行のまましっかり残していく必要がある

② 教師の負担を減らすためにも、さまざまな現場環境において校歌の利便性を高めるシステムがあると便利



③ 校歌が教材になるのでは？

にとつて身近な歌である校歌を「総合学習の教材として活用できないか」という発想に広がりました。校歌はその土地の文化や風土が歌われていることが多いため、地理や郷土の歴史という社会科学の学びや、郷土愛の醸成に役立ちます。また、資料集めの際に、作者からの手紙や、何度も書き直している下書きやスケッチを見つけたことがあり、「この思いを生徒たちにも伝えてあげたい」とも考えました。歌詞にこめられた作者の思いを紐解くことは、音楽はもちろん国語の学びにもつながるはずで

最終部..活用シーンを創造する

校歌が愛され、さまざまなシーンで歌われ生かされるために、当協会では今後もさまざまな施策を提案していき

たいと考えています。具体的には次のようなことが可能です。

- イ** いろいろな面で活用されるよう、動画にするなど新しい扱い方を「提案」
 - ロ** ケーシオンを問わずに永久的に活用できるように、楽譜を「デジタル化」
 - ハ** 廃校となっても記録が残るよう、協会のクラウドに「アーカイブ」
 - ニ** 日本中から収集し必要機関へ情報提供できるように、楽譜やデータを「集約」
 - ホ** 本質から伝えられるよう、学校などで特別授業の「開講」
 - ヘ** 平穩に式典などで斉唱された記録が思い出となるよう、校歌アルバムを「制作」
 - ト** 特別なアレンジにしたり第二校歌を制作したりして、活用法を「活性化」
 - チ** 地域でも歌い継がれて文化が振興していくよう、イベントなどを「開催」
- 校歌は卒業後も同窓会や結婚式などで歌われることが多く、優れたコミュニケーション・ソングと言えます。校歌を再発見し、新たな活用法を見つけ、校歌がより豊かに、かつ多彩（カラフル）になっていく。そんな活動を、今後も続けていきたいと思っています。

一般社団法人 全日本校歌協会
(浜松市中央区曳馬 6-13-22)
出前授業などのご要望はお問い合わせフォームよりご連絡ください。
協会の活動にご賛同いただける方も随時募集しています。

全ての若い世代へ 豊かな舞台芸術にふれる機会を



■舞台公演映像を使用した授業の様子（日本大学芸術学部）

一般社団法人EPAAD
教育利活用担当 中山 静子

一般社団法人EPAAD（イーパッド）では、全国の高等学校や大学などの教育機関に向けて、日本を代表するプロの舞台公演映像を配信する「舞台芸術映像視聴トライアル」を進めています。地理的・経済的・時間的な制約を超え、若い世代が多様な芸術表現に出会い、感じ、考える機会を広げる取組です。

舞台公演映像をより身近な学びの資源に

私たちEPAADは、舞台芸術のデジタルアーカイブとその利活用を推進する団体です。2020年、新型コロナウイルス感染症の拡大により公演活動が一時停止する中、舞台芸術界の持続的な再生と収益力の強化を旨として、日本舞台芸術ネットワークと寺田倉庫株式会社が協働し、文化庁の支援を受けて事業を開始しました。これまで、全国の劇団や主催者と連携し、約3千800本（2025年3月

末時点）の舞台公演映像を収集しています。

舞台芸術は、人と人が出会い、互いの想像力を通じて世界を広げる文化です。しかし実際には、公演会場が大都市圏に集中していたり、チケット代が高額であったりと、若い世代が舞台にふれる機会は限られています。また、舞台は「その瞬間にしか存在しない芸術」であるため、公演期間を過ぎれば鑑賞できません。

こうした地理的・経済的・時間的ハードルを超えて、若い世代が多様な舞台に出合える環境をつくりたい。その思いから始まったのが「舞台芸術映像視聴トライアル」です。

舞台公演映像を教材に 「舞台芸術映像視聴トライアル」

本トライアルでは、厳選された160作品以上のプロの舞台公演映像を、高等学校や大学などの教育機関に向けて配信しています。特別な機器は必要なく、パソコンとインターネット環境があれば導入が可能です。図書室などに視聴用パソコンを設置することで、生徒・学生が自由に鑑賞できるほか、授業やゼミでの教材、演劇部などの課外活動での作品研究にも活用さ

れています。配信には寺田倉庫が提供するコンテンツ管理サービス「Tera-sight」を採用し、著作権を適切に保護しながら安心して視聴できる仕組みを整えました。収録作品は、広く舞台芸術業界と連携して集められたもので、演劇界の芥川賞と呼ばれる岸田國士戯曲賞受賞作をはじめ、現代日本の舞台を代表する多彩な作品が含まれています。

また、授業での活用を支援するために、教員向けの解説冊子『COMPASS』や、アーティスト自身が創作の背景や作品にこめた意図を語る解説動画も提供しています。これらの教材により、授業の準備が容易になり、学生・生徒の作品理解がより深まることが期待されています。



■視聴用パソコンで作品を鑑賞する様子（跡見学園女子大学図書館）

鑑賞のハードルを超えて 豊かな学びを育む

実際にトライアルを導入した教育現場からはさまざまな声が寄せられています。ある高校演劇部の顧問の先生は「演劇部に所属していても、プロの舞台を観たことがある生徒はほとんどいない。劇場に連れて行くのは現実的に難しく、こうした教材を待っていた」と話してくれました。

大学の授業で利用した教員からは「アーティストインタビューによる説動画が非常に有効だった。10分程度で作家や演出家の背景を理解でき、学生が主体的に作品を読み解こうとする姿が見られた」との声があがりました。別の大学教員は次のように語ります。

「学生たちは創作に関心はあるものの、鑑賞となるとどの作品を選び、どう観たらよいかわからず積極的にならない。しかし、授業で作家の特徴や時代背景を解説したうえで映像を見せると、一気に関心を示し、中にはその作家の舞台を実際に観に行く学生も出てきた。映像と教材の充実が劇場に足を運ぶきっかけにもなりうる」。

こうしたエピソードは舞台映像の教育利用が単なる代替手段ではなく、若者が文化と出合う入り口として機能し

ていることを示しています。舞台を観ることは他者の想像力にふれること。その経験が他者と自己の理解を促し、コミュニケーション力の育成につながります。

教育の未来に向けて

今後は、視聴できる作品のラインナップを順次拡充し、より多様な舞台芸術の魅力を教育現場に届けていきます。あわせて、現場の声を反映しながら、機能の充実にも取り組む予定です。例えば、作品をより簡単に探せる検索機能の改善や、予習・復習に個別視聴可能な機能の追加など、

教育現場のニーズに応じた機能拡張を検討しています。限られた時間や予算の中で芸術教育を行うことは容易ではありません。しかし、オンライン配信を通じて「観たいときに観られる」「関心を広げた先で自らふれられる」環境を整えることは、教育の質と多様性を支える大きな一歩になると考えています。多くの学校では舞台鑑賞は年に一度あるかどうかの貴重な機会です。舞台公演の映像配信の広がりにより、舞台鑑賞が「行事」ではなく「学び」として若い世代の心を育み、現代社会を生き抜く礎となることを願っています。



詳しくは、一般社団法人 EPAD のウェブサイトをご覧ください。



全国各地のさまざまな取組を紹介します。

神奈川

姉妹都市ホノルルとの交流を通して

～「相手意識」を大切に活動の実践～

茅ヶ崎市立鶴が台中学校 校長 力石 裕司

茅ヶ崎市教育委員会では、コロナ禍前まで数年間、姉妹都市・ホノルルへの教員派遣研修を実施し、さまざまな形で両市の子どもたちの交流を深めてきた。今年度はこれまでの取組の成果を生かし、本校の英語の授業で生徒が「伝えたいこと（日本の学校や茅ヶ崎の文化・習慣など）」を「伝えたい相手（ホノルルの生徒）」にビデオメッセージにして発信する「ホノルル・プロジェクト」に取り組んでいる。

ホノルル在住の姉妹都市交流特命大使、市の姉妹都市担当職員や市教育委員会の指導主事による特別授業では、「ホノルルの生徒が知りたいことは何か」「自分が伝えたい内容を相手によりよく伝えるためにはどんな工夫が必要か」などについて、さまざまな助言をもとにグループで話し合った。本プロジェクトは、生徒が本市の英語教育のキーワードである“相手意識”をもってリアルなコミュニケーションを体験することで、生徒自身の世界を広げるとともに、外国の言語や文化だけでなく日本、茅ヶ崎への興味・関心も高まるような取組になると考える。

AIが急速に発展し、世界中どこにいても異なる母語の人々と即時性のあるやりとりが容易に成立する現在、学校における英語教育ではコミュニケーションスキル（聞く力、話す力、語彙や表現力等）の習得だけでなく、伝える相手を明確に意識し、「本当に伝えたいこと」をもち、「よりよく伝えるための工夫」を考えさせるような学習機会の設定がさらに重要になってくるはずである。

伝える相手を意識し、仲間とトライ＆エラーを繰り返して作成したビデオメッセージ。その完成までの過程こそが価値のある学習だが、ホノルルの生徒からの返信を受けとった時の生徒の笑顔と達成感、そして少しでも世界に目を向けた生徒たちの将来の無限の広がりを想像すると、ホノルルからの返信が待ち遠しい。



姉妹都市・ホノルルをテーマに「アロハデー」を設定。5月～10月は水曜日のみ教職員がアロハシャツを着用。この日は「アローハ」の挨拶とともに、多くの生徒が笑顔に。

福島

大震災を乗り越えて ICT 教育で活路を開く

新地町教育委員会 指導主事 佐藤 和子

新地町では、2010（平成22）年度に総務省「地域雇用創造 ICT 絆プロジェクト」事業の採択を受けて以来、現在までさまざまな実証研究事業に取り組んでおり、ICT活用教育を教育の柱に据え教育DXを推進してきた。2011年の東日本大震災では太平洋沿岸部に位置する本町も甚大な被害を受け、学校現場では課題が山積していたが、支援を必要とする子どもたちの心や学校機能そのものに対して、ICT教育が復興への道筋を示してくれた。端末をはじめとした情報技術が導入された教室では、一人一人の学びを確保した授業づくりに挑戦し、新たな教育に希望を見いだしたことは記憶に新しい。そして、現在でも新地町の教育理念にICT教育が大きく位置づけられていることに変わりはない。

毎年恒例となった「新地町 ICT 活用発表会」は震災の年から始まり2025年で15回を数える。11月7日に「情報活用能力を高め、自己の学ぶ力を鍛える児童生徒の育成」をテーマとして町内の小学校3校、中学校1校が実践研究の成果を発表した。学習者主体の学びを支えるデジタル基盤を十分に活用しながら、自由進度学習、地域連携プロジェクト型学習、遠隔交流学習等さまざまな授業を展開し、参加者と膝を交えての意見交流会も行い、GIGAスクール構想実現に向けた熱い議論が交わされた。

これまでの取組から英語教育にも成果が現れてきている。2024（令和6）年度の中学3年生の英語検定3級取得率は全国平均（52.4%）を大幅に上回り、73%を超えた。小学校ではイギリスとつなぎ、中学校では東京北区の中学校とオンライン学習を行っている。4技能（リスニング、リーディング、スピーキング、ライティング）のスキル向上にはICTが欠かせない。本町では10年間を見据えた保幼小中連携での英語教育に力を入れている。

今後も、新地町ならではの特色ある教育活動を推進し、未来を担う子どもたちの育成に取り組んでいきたい。



大分

別府市発!! 新しい学び方・休み方、 「たびスタ」休暇

別府市教育委員会 教育政策課 参事 時松 哲也

別府市の産業構造は第3次産業の割合が高く、特に主産業である宿泊業・飲食サービス業に携わる人の割合は全国平均の約2倍となっています。

そのため、保護者においても仕事の繁忙期が祝休日等に集中し、学校が休みでも親が仕事で、家族と一緒に過ごす時間をもちづらいという状況があります。

このようなことから、平日の家族旅行を推奨し、「旅育※」の推進と平日や閑散期の観光需要のシフトによる地域経済の活性化を旨とする取組として、令和5年9月に「たびスタ」休暇を導入しました。

※旅育…旅行を通して家族でいろいろな経験をし、子どもの心身の成長を促すこと。「たびスタ」休暇は地域・家庭での教育活動の一環と捉え、欠席とはせず出席停止等と同じ扱いとしています。

導入以降、令和5年度の7か月間で延べ1,058人が、令和6年度は年間で延べ2,075人が取得するなど利用が着実に広がっています。

アンケートでは、「たびスタ」休暇を取得した保護者の97%が「よかった」と回答するなど肯定的な意見が多く寄せられ、取得できる日数などについて「拡充してほしい」との要望も示されていたことから、年度内に取得できる日数を3日から5日へと段階的に拡充を行いました。

また、「たびスタ」休暇取得による学習の保障として、市立小中学校の全ての児童生徒に総合学習アプリを導入し、休暇中に受けられなかった授業を各自のタブレットで授業動画を視聴することにより、補うことが可能となりました。

「たびスタ」休暇の取組については多くの問い合わせが寄せられており、導入する自治体も増えています。この取組が広く認知され普及してゆくことで、学校生活とは異なる多様な経験を通じて子どもたちの見識が広がることと、観光需要の平準化による地域経済の活性化につながることを期待しています。



別府市公式ホームページ内「たびスタ」休暇について

別府市の新しい学び方・休み方

「たびスタ」休暇

旅 + 学習(study)



平日の家族旅行を推奨し、旅育の推進と平日や閑散期への観光需要のシフトによる地域経済の活性化を目指す取組で「旅」と「学習(study)」を組み合わせた別府市発の新しい学び方・休み方です。

山梨

人口約600人の村が挑戦 小菅村公営塾 「すたすたスクール」

小菅村教育委員会 教育長 藤木 成弘

村の未来を拓く三つの施策

山梨県の東北端に位置する小菅村は深刻な人口減少に直面しています。この難題に対し当委員会は「教育」を村創りの基盤と位置づけ、三つの施策を展開しています。

一つめは、村外からの子育て世代の移住を支援する「小菅村源流親子留学」。留学者の学校とのマッチング、住環境や保護者の仕事についてもトータルでサポートを行います。二つめは、学校教育におけるICTの積極的な活用や体験学習の充実です。村内の小・中学校では都市部や、瀬戸内地方の学校とのオンライン交流などを積極的に進め「学校情報化優良校」として認定をされています。最後が、地域教育の基盤を担うべく令和6年度に設置した公営塾「すたすたスクール」です。塾名には「子どもたちがすたすたと自身の人生を歩き、切り拓いていける、自立した人間になってほしい」という願いが込められています。

地域人材を活かした運営体制

「すたすたスクール」は毎週月曜日と水曜日の週2回開催。宿題の見守りといった基礎的な学習支援はもちろんのこと、地域のかたを講師とする将棋教室、村内の物流企業と連携したドローン教室、村の森林関連施設での体験会など、村の資源を最大限に活用したユニークな体験学習を取り入れています。運営は8人前後の熱意ある地域スタッフが担い、そのほとんどが教職経験者ではありません。しかし、だからこそ小菅村の風土や子どもたちの実情に合わせた柔軟な対応が可能となり、塾の魅力の一つになっています。

持続可能な地域教育モデルへの展望

現在、移住世帯の子どもも含め、村内の小・中学校に在籍する児童生徒の9割近くが「すたすたスクール」に通っており、当塾が子どもたちにとって「なくてはならない存在」となっていると実感しています。これからも地域コミュニティ全体で子どもの成長を支え、過疎地域における新たな教育モデルを確立したいと考えています。



「小菅村源流親子留学」ウェブサイト

10代の読者に向けた本づくり ～岩波ジュニア新書の取組～



岩波書店ジュニア新書
ジュニアスタートブックス編集長 須藤 建

私は日頃、「岩波ジュニア新書」という若い読者に向けた新書のシリーズや、「岩波ジュニアスタートブックス(通称…ジュニスタ)」という中学生のための学習入門シリーズの編集を手がけています。本連載では、私たち編集部が書籍作りにおいて何を目ざし、どのような取組を行っているかをご紹介します。10代の読書状況や、読むことの楽しさや大切さについてお伝えしていきたいと思っております。

「岩波ジュニア新書」が目ざすもの

岩波ジュニア新書は1979年に始まりました。創刊1938年の岩波新書はその前年に勃発した日中戦争や、高まる軍国主義、国粹主義の台頭を背景にして、現代人の世界的教養を届けることを目ざしたシリーズでしたが、それから約40年後に発刊した岩波ジュニア新書は情報社会の拡大と受験競争が激化する中で、「読書を通じて自分を成長させる余裕が若い世代になくなってきているのではないか？」という問題意識に基づいて始まったようです。もちろんこの時代の、情報社会の拡大とはインターネットの発達によるものではなく、マスコミュニケーションの発達によるものでした。

現在でも巻末には「岩波ジュニア新書の発足に際して」という一文が載せられています。そこには「現在の学校で生じているささいな学力の差」とらわれたり、「自分の将来を見限ったり」しないほしいこと。そして「現実立ち向かうために必要とする知性」を「よらのなかに育てるのに役立ててもらえる」よ

うに「書き下ろしで提供する」とあります。このような問題意識や理想は今も変わりません。

次世代の読者たちと共に進むために

しかし、ご存じの通り時代は激変し、1979年の発刊時から、若い読者を取りまく状況や、読者の興味・関心も絶え間なく変わってきています。編集部ではそれらをできるだけキャッチできるように、いくつかの仕組みを意識的に設けてきました。一つはモニター読者の制度、もう一つは出張読書会です。モニター読者は1999年に始まった制度で、年に一回、全国の学校から読者を募集しています(2026年度の応募締め切りは1月末)。中学・高校・専門学校・短大・大学の教員・司書のかたを対象に、毎月ジュニア新書の新刊をお届けし、感想をメールやファクシミリなどで送っていただいているのですが、生徒の皆さんが感想を書いてくれることもあり、反響を確かめる意味でも、次の企画を考えるうえでも大いに参考になっています。

一方、出張読書会は数年前から始めた取組です。東京をはじめ、神奈川、埼玉、千葉県など東京近隣の中学校や高等学校に編集者が訪問し、生徒の皆さんと本の感想や考察を語り合っています。読者のかたがたと直接お会いできることはもちろん、学校図書室の様子を見て、その空気を感ずることなども、本の届け先を具体的にイメージするうえで意義深いことだと実感しています。

若者の変化を感じて

年に数回訪問しただけで、全てが理解できるものではありませんが、活動の中で若い読者の読書傾向や、読書への向き合い方について変化を感じることはあります。それは日頃の編集活動や宣伝方法についても検討を促すものです。今回はこの出張読書会について詳しくご紹介します。



ジュニア新書の創刊1点め(左)は思春期の悩みに長年教師をつとめた著者が答えるもの。創刊1000点め(右)は「小説・物語以外のブックガイド」となった。

須藤建 (Takeru Sudo)
1979年神奈川県生まれ。大学卒業後、台湾留学、高校での教員補助などを経て、2005年岩波書店入社。電子出版編集部、児童書編集部、単行本編集部を経て、ジュニア新書編集部へ。2013年1月に10代向けの海外文学シリーズ「STAMP BOOKS」を創刊。2024年10月から岩波ジュニア新書、岩波ジュニアスタートブックス編集長。

【連載第2回】（全3回）

『現代アートのすゝめ』



森美術館 館長
片岡 真実

撮影：新津保建秀

現代アートは世界を学ぶ教室。そう考えてきたことを、2023年に森美術館で「ワールド・クラスルーム展」として展覧会化した。欧米を中心に発展してきた現代アート界では、ベルリンの壁崩壊後、急速に多様な地域からの発信が盛んになり、旧社会主義国、北欧、アジア、ラテンアメリカなどで繰り広げられていたモダニズムがさまざまな機会に紹介されるようになった。現代アートの専門家と呼ばれるキュレーターも、未知の地域から生まれたアートについて解釈するにあたり、作品の歴史的、社会的、政治的背景を学ばざるを得ない。アーティストの生い立ちを含め、その地域や時代を学ぶことで、この世界がいかに多様で興味深いものであるかが見えてくる。

2009年に個展「アイ・ウェイウェイ展-何に因って?」を企画した。彼は、中国を代表する近代詩人、アイ・チンを父に1957年に北京で生まれ、翌年、下放された父とともに新疆ウイグル自治区に移住。文化大革命が終わるまで過ごした。北京へ戻った後、1981年には渡米し、12年間

を東海岸で過ごす。幼少期の人権に関する疑問、そして80年代のニューヨークで見た芸術家のアクティビズム（積極行動主義）などを吸収し、現代アートに起点を置きながらも、基本的人権の擁護に強く関連する作品を発表してきた。2008年の四川大地震に

際し、豆腐建築と呼ばれた脆弱な構造の校舎の下敷きになって5,000名以上の小中学生が亡くなったと言われる。子どもたちの名前を列記してオンライン上で読み上げるパフォーマンス、ランドセルを蛇の模様にして構成した《蛇の天井》など、社会・政治的な題材を扱った作品を続々と発表し、2011年には81日間中国当局に身柄を拘束された。森美術館での個展は、2012年から14年にかけて米国とカナダの主要美術館に巡回したため、私は自宅軟禁されていたアイ・ウェイウェイに会いに北京へ向かい、打ち合わせを重ね、彼のアシスタント・チームとともに展覧会を各地で創り上げた。この間、中国の近代史を学び、改革開放経済以降の中国の社会変革を実感した。

2005年に開催された「杉本博司：時間の終わり」も担当し、その後、さまざまな機会に自分の企画にも招待したことで、杉本の作品の発展を追ってきた。明快なコンセプトに基づくシリーズの一つに、「Conceptual Forms（観念の形）」がある。シリーズの中にある《Surfaces》は、19世紀末から20世紀にかけて製作された石膏製の数理模型を撮影したものだ。コンピュータ以前の時代、代数幾何学、微分幾何学などさまざまな数式が100年前の教室で、石膏で視覚化された物質を使って学ばれていたことを伝えてくれる。東京大学では理学部数学教室の中川銚吉教授が1910年頃に購入したとされている。杉本が撮影したのは東京大学総合研究博物館が所蔵する数理模型だ。数式によって定義される曲面を三次元で可視化した幾何学模型群や産業革命時代の機構モデル群は、杉本曰く「芸術的な野心を全くもたずに制作された」造形であり、こうした非芸術性の中に芸術性を感じたことが着想のもとにあった。形を与えられた数式は、杉本のモノクロームの写真によって、荘厳な存在感を放つ。

これらは限られた事例だが、私にとって現代アートは政治、社会、数学など多様な観点から世界の構造を理解する、極めて刺激的な入口であり続けている。



● オンタリオ美術館での《蛇の天井》の展示風景（部分） 撮影：筆者

「生き方の正解は一つじゃない」 幼魚から学んだ、多様性と諦めない力

ほ・っ・と・な・出・会・い

岸壁幼魚採集家 鈴木 香里武さん



「岸壁幼魚採集家」とは？

漁港などの岸壁で幼魚（魚の赤ちゃん）をタモ網で採集し、その魅力を伝えるという仕事をやり続けていたところ、メディアをはじめ企業や自治体からお声がけいただけられるようになり、気がつくくと仕事になっていました。ぴったりく職業名が存在しないので「岸壁幼魚採集家」と名乗っています。

そもそも両親が漁好きで、まだ0歳だった僕を岸壁で寝かせて魚採集を楽しんでいたそうです。両親と一緒に魚を捕まえ、自宅の水槽で育てたり調べたりしているうちに、幼魚のユニークな生態を知り、どんだんのめりこんでいきました。海は深海に潜るほどプランクトンなどの餌が少なくなるため、幼魚は栄養豊富な浅瀬で過ごすことが多いのです。つまり、漁港付近の海は珍しい魚の赤ちゃんに出会える天然の水族館なんです。

百種百様の生きざまに励まされて

弱い存在である幼魚たちは、生き残るために人間の想像を超えるような生存戦略を駆使して進化を遂げてきました。その結果、驚くべき多様性を獲得しているのです。例えば「ミナミハコフグ」の幼魚。ビビッドな黄色に黒の水玉模様という派手な姿ですが、これは弱点である目を隠すための戦略。全身に黒い点（偽の目）を散らすことで、外敵の攻撃的目を分散させて

います。一方、幻の深海魚と言われる「リュウグウノツカイ」の幼魚は、下から見たときの影

をできるだけ小さくするために、細長い体を縦にして泳ぎます。こうして下から狙っている外敵の目をくぐりぬけようとしているのです。目的は同じ「生き抜くこと」。しかしその手段は「あえて目立つ道」と「できる限り隠れる道」と真逆のアプローチ。枯れ葉のふりをする子もいれば、毒クラゲに守ってもらう子もいて、100種類いれば100通りの生きざまがあるのです。それぞれが自分なりに工夫をし、厳しい大海原で諦めずに生き抜こうとしている。そんな彼女の姿を見るだけで元気をもらえる気がします。

自分の原点を作った小学生時代の思い出

今でこそ大勢のかたを前に講演などを行っています。子ども頃は極度の人見知り。挨拶もできないほどで、小学校では友達もおらず、休み時間は一人でアリジゴクの本を掘り返しているような子どもでした。低学年のうちはそれでも平気でしたが、5年生になると周囲から浮いていることに気づき始め、徐々に学校が苦痛になっていきました。朝起きると腹痛に襲われ、がんばって家を出ても、通学途中で吐いてしまふ……。精神的に追い詰められ、不登校寸前の状態でした。そんな時、担任の先生がクラスで魚を飼い、僕を飼育係に任命してくれたのです。すると「魚のことは香里武が詳しい」と頼られるようになり、クラスの中に居場所ができたんです。さらに、その時初めて、自分の中だけで完結し満足していたことを「人におもしろさを伝え、一緒に楽しむのもっと楽しい」と知ることができたのです。僕は一貫して、幼魚の魅力伝えることを続けてきましたが、その原点はあの時に育まれたのだと思います。後に、水槽は先生が自費で購入してくれたものだと知り、今でも、本当に感謝しています。

「壁を作る言葉」使っていませんか？

2022年には、念願叶い静岡清水町に「幼魚水族館」を開くことができました。現在はとある海辺の地域で、町全体を海や魚に関する体験学習の場にするプロジェクトを、行政や地域のかたがたと推進中です。

好きなことを続けてきただけなので、これまでに「苦しい」とか「疲れたな」と思ったことはありません。ただ、昔から、折につけ「君はまだ若いんだから」とか「前例がない」と最初から壁を作る言葉をかけられることが多く、その度に少し残念な気持ちになっていました。なので、子どもたちには、壁を作る言葉は使わないように心がけています。例えば「将来、何になりたい？」と尋ねるシーンをよく見ますが、あの言葉も壁というか枠を作ると思っています。「何になりたい？」と聞かれると、子どもは「警察官」とか「サッカー選手」とか既存の職業名に当てはめて答えざるをえません。さらに、本当の興味は別にあっても、言い続けることでそれが本心だと思ひ込んでしまっています。子どもたちには「何に興味があるの？」「どんなところがおもしろいの？」と尋ねてあげてほしいですね。

僕自身も、壁を作る言葉、を使いそうになるときがありますが、そんなときはやはり幼魚に向き合います。彼らが「正解は一つじゃないよ」と教えてくれますから。

鈴木香里武 (Karibu Suzuki)

1992年生まれ。岸壁幼魚採集家、「株式会社カリブ・コラボレーション」代表取締役社長、「幼魚水族館」館長。幼少期から魚に親しみ、学習院大学大学院で観賞魚の印象や癒やし効果を研究した後、現在は北里大学大学院で稚魚の生活史を研究。メディアやイベント出演、執筆をはじめ、海や魚の魅力伝える多彩な活動を行う。「水の世界のひみつがわかる！」シリーズの海の生物の図鑑 (KADOKAWA) など著書多数。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆井端監督の巻頭インタビューは、中日ドラゴンズ時代から井端選手のファンだったこともあり、興味深く読ませていただいた。特に子どもたち一人一人を「ちゃんと見る」とか「子どもたちの個性や得意なことを伸ばすほうを優先」等は、現代の教育に必要な提記と思った。
- ◆広島市の平和学習プログラムは、全国の学校に利用してほしいプログラムですね。戦争を知らない世代が多くなるなか、平和学習は教育の根幹だと思います。
- ◆部活動の地域展開は大変興味深く読ませていただきました。自治体によって取組は異なりますが、各自治体が大いに参考にできる取組報告と感じました。
- ◆「ほっとな出会い」の指揮者・吉田さんの話には本当に感動しました。音楽家としての信念を貫かれる吉田さんの姿に、ただただ頭が下がる思いです。

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自問自答、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつなげていく。そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版